

Tokai Fubokon Letter

第3回文化講座 ご報告

『ウクライナの文化講座』

2022年度第3回目の文化講座「ウクライナの文化」が1/21(土)に音楽室にて開催されました。約80名の皆さまが講師の方のお話や音楽に熱心に耳を傾け、ウクライナに思いを馳せるひと時となりました。

●開講にあたって

第3回は東海と異文化世界をつなぐ国際色豊かな文化講座。今回はウクライナとご縁を結びました。

●講師のご紹介とプログラム



講師はダツェンコ・イーホルさん。ウクライナのポルタヴァ州出身で、名古屋市在住。現在は名古屋大学などでロシア語を教えていらっしゃいます。そして、イーホルさんの奥様でピアニ

ストの水野真紀さん。真紀さんは、第二部で素敵なピアノ演奏を披露してくださいました。さらに、お仕事の都合によりご出席が叶いませんでしたが、舞台・TV・映画と多方面でご活躍中の真紀さんのお母様、水野千春さんも音声で朗読劇にご出演くださいました。また、日本に避難されているイーホルさんのお父様・お母様・お姉様も、わざわざお越しくださいました。さらに、東海中高男性合唱団、東海学園交響楽団の有志メンバーと真紀さんの共演もあり、東海ならではの華やかな講座となりました。

第一部

ウクライナの文化

お話: ダツェンコ・イーホルさん

*国旗 *国章



ウクライナの国旗は、青い空(青)と豊かな麦畑や咲き誇るヒマワリ(黄色)、そして空と平野を繋いでどこまでも続く地平線を表しています。ウクライナでは、このような風景がここかしこで見られるそうです。国章は、青盾に三叉槍(三つの穂をもつ槍)。こちらも、青と黄色のウクライナ・カラーです。

*ウクライナの歴史と民族性

ヨーロッパとロシアの間に位置し、常にその間で双方からの影響を受けながらも、国土を守り、独自の文化を築いてきました。その中心的役割を果たしてきたのが、コサック(勇気ある兵士たち)です。ウクライナの民族性を理解するキーワードは、コサック、自由と独立を目指す精神なのです。

*食べ物と工芸

ウクライナの食べ物といえば、サーロ(豚の塩漬け脂身)、ヴァレーニキ(小麦粉の皮で野菜や肉を包み茹でたもの)、黒パン、そして日本でもお馴染みのボルシチ(ビーツのスープ)です。工芸では、美しい刺繍が有名です。ヴィシヴァンカという民族衣装は、首周り、袖口などに繊細な刺繍をほどこします。鳥は結婚や子の巣立ち、繰り返すパターンは永遠を表す、というように、色や模様のパターンには意味があります。イーホルさんのお父様が実際にヴィシヴァンカを身につけてご参加くださいました。その美しい衣装に、会場の皆さまも興味津々でした。



第二部

ウクライナの童話『てぶくろ』『セルコ』

朗読:水野千春さん

ピアノ:水野真紀さん

イーホルさんの解説の後、千春さんの声に合わせて真紀さんのピアノ演奏が行われ、スクリーンに映し出された絵とともに2つの童話朗読劇を鑑賞しました。

『てぶくろ』

おじいさんが森に落とした手袋に、次々と動物たちが入り込みます。ねずみ、かえる、うさぎと次々に動物がやってきます。そして最後は大きな熊まで。小さい手袋に「入れて」「どうぞ」、どんどん入ります。寒い森、ぎゅうぎゅう詰めの動物たちの想像が膨らみます。



『セルコ』

老犬セルコは、役に立たなくなりお百姓の家から追い出されてしまいます。友人オオカミの機転で、再び家族の信頼を得たセルコは、オオカミにお礼をと、お祝いの席と一緒に忍び込んで…。セルコとオオカミの友情物語です。

『ウクライナ国家』

東海中高男声合唱団

ピアノ:水野真紀さん



『Carol of the Bells』ウクライナ民謡

東海中高男声合唱団

東海中高男性合唱団6名が、真紀さんのピアノ伴奏でウクライナ国歌をウクライナ語で熱唱。そしてCarol of the Bellsは、顧問の平下先生(中学理科科)の指揮のもと、アカペラで歌いました。合唱団のメンバーは、直前までイーホルさんのお父様にウクライナ語の発音を教えていただき、美しく力強いウクライナ語の調べが会場を満ちました。

『メロディー』

東海学園交響楽団

有志

ピアノ:水野真紀さん



東海中高交響楽団よりバイオリンとチェロの3人が出演し、真紀さんのピアノとコラボ演奏を披露しました。弦楽器ならではの美しいハーモニーが音楽室全体に広がりました。

『Le Reve~夢~』

ピアノ:水野真紀さん



真紀さんのピアノソロ。この曲を作曲したミコラ・リセンコは、ウクライナ出身の音楽家で、イーホルさんと同じ州の出身。ご縁を感じての演奏でした。

お父様の歌

最後に、イーホルさんのお父様がソロで熱唱してくださいました。美しいヴィシヴァンカの装いで、朗々と情感たっぷりに歌い上げる姿に、会場全体が引き込まれました。

●水野真紀さんからのメッセージ

イゴールの家族もとても感動しており、合唱やオーケストラ部の子たちもとても素晴らしい!と言っておりました。こういう機会が増えて、日本でウクライナについて知ってもらえるきっかけになれば幸いです。本当にありがとうございました。



●参加者の感想

・音楽と共にウクライナ文化について、堅苦しくなく、とても楽しく学ぶことができました。参加してよかったです。ありがとうございました。これからも応援しています。本当に素敵なお夫婦、ご家族ですね!

・ウクライナの言葉はいろんな所で聞くようになりましたが、詳しいことまでは知りませんでした。文化の

お話や音楽や歌を聞けて、とても充実した楽しい時間が過ごせました。特に『てぶくろ』は子どもたちが好んだ本の1つで、懐かしく思い出しました。まだ冬の寒さが続きますが、早く春が来るようにと祈っております。ありがとうございました。

●まとめ

今この難しい時期に、「ウクライナ」をテーマとしてどのようなウクライナの講座をお届けできるか、主催者として戸惑う気持ちもありました。しかし、私たちの知らないウクライナについて、穏やかにお話くださるイーホルさん、美しい音楽を奏でてくださる真紀さんにお会いして、ウクライナの魅力にどんどん引き込まれていきました。長い時間を経て、風景、民族性、伝統芸能、工芸品、そして生活が、今ここにあり、そのすべてが音楽の旋律の中にあります。前半のイーホルさんのお話が、後半の音楽ですべて包み込まれる…そんな言葉では言い表せない不思議な体験をしました。この体験こそが、異文化に触れるということなのではないかと思います。講演後、「文化とは、何が好きかということなのだ」と感想を述べられた先生がいらっしゃいましたが、まさにウクライナの方々の好きなもの、大切にしているものを教えていただいた、そんな講座となりました。ウクライナに一日も早く平和が訪れることを願ってやみません。ご参加いただき、ありがとうございました。

高2学年懇談会ご報告

高2学年懇談会が2/18(土)に講堂にて開催されました。当日は約180名の父母・教員の皆さんが参加し、以下のようなプログラムで会が進行しました。

○オープニング 東海学園交響楽団演奏

○学年主任挨拶 高校2年学年主任 籠谷優先生

○受験期をどう過ごすか

高校3年学年主任 松本一成先生

○OB 父母発表 卒業生父母 和佐田美代子さん

○OB 生徒発表 小山田雄貴君(名大・医学部)

山下晴生君(大阪大・人間科学部)

松本一成先生(高2学年主任)

【1年間の流れ】

4月の最初の授業は、みんなやる気に満ち溢れている。受験は非常に長いマラソンのようなものだから自分のペースで継続することが一番大事。



高3になると、校内・校外の「模試」が始まる。試験範囲は習ったところまで。外部模試は緊張感も含めて本番に近い形で受けてほしいので、公開会場で受けるのをお勧めする。共通テスト模試はリスニングでIC プレーヤーを使う。一日がかり、朝9時から夜8時まで。時間配分や解答科目でミスをしたりすることもあがるが、回数を重ねるなかで克服しながら、どう仕上げていくかが大事。

学校行事は、5月にレク大会、6月に遠足がある。7、8月は三者面談の季節。志望校について生徒から自分の意志を聞き、じっくり話し合っって情報を共有。夏休みの過ごし方にも言及する。

9月には共通テストの願書を学校から一括で申し込む。書き方の説明を HR で行い、郵便局で各自振り込みを行う。下旬には東海で最後の記念祭。今年の3年生は、お祭り縁日という形で実施し、自分のクラスは「バブルサッカー」(風船に入って行うサッカー)を楽しそうにやっていた。

この時期にはスランプになる子もいる。結果がなかなか出なくて…という子たちには、面談などを行って後押しをする。志望校を安易に変えるのではなく、どうすれば近づけるかという点で、親御さんからも支えていただけるとありがたい。

11月には4回目の模試。12月に最後の校内定期考査。ここを頑張っって乗り越えろと、モチベーションアップにつながるので、頑張りなさいと伝えていた。

最後に1月。共通テスト本番。理系は名古屋大学、文系は南山大学で行われ、去年と反対だった。大学からの要請で当日の応援は控え、応援動画を作って激励した。去年は数学が難化したのでいろいろあっ

たと思うが、今年も平年並み。生物が少し難しく得点調整が行われたが、生徒たちの顔を見ているとホッとしていたというのが正直なところだと思う。中には失敗したという子もいて、その後に各担任の先生が面談をして、出願先を相談し、「最後は自分で決めなさい」という姿勢で覚悟を決めてもらった。二次の願書は自分で書くよう伝えた。これが1年間の大体の流れ。

【3つのお願い】

「あまり手取り足取りやらないでほしい」

やっぱり「生徒が自分で大学を決めてほしいし、お金以外の手続きも自分でやってほしい」。大学院も含めると、これから先大学で6年間過ごすことになる。大学のことを知らずに行くのは、後悔するんじゃないかと思う。よく調べてくださいということ。特に過去問。そして、面接を行う場合には、大学のアドミッションポリシーや、どういった研究室にどんな設備があるかなども。できれば現地に行って、どんなところにあるか見ておくとよい。春休みなどに実際に出かけてみてほしい。

「基本的に見守ってあげてください」

親御さんもストレスを抱えることになると思うので、何かストレス解消になるものを待たされた方がよいのではないかと。子どもばかり見ると結構大変なので、ちょっと目を逸せるものがあるとよいと思う。

「人と比べないこと」

大事なことは、その子の過去と比べてどれだけ上がったかということ。それから、「ポジティブな声かけ」。

リフレーミングと言うが、まだできていない場合には「伸びしろがあるじゃない」など、プラスの言葉に変えるだけで、家庭は明るくなると思う。「勉強しなさい」とつい言うてしまうが、これはよくない。たぶん返事としては、「今からやろうと思った」とか「やる気が失せた」とか…。これは反抗期だからではない。人間の特質、習性で、「心理的リアクタンス」と呼ばれるもの。人間は自分の自由を制限されるのを嫌うので、制限されると反発する。

また、「遊んでばかりいると成績下がるよ」と言うてしまうこともあるが、これは「ブーメラン効果」をもたらす。説得するつもりが、かえって強い抵抗や反発を招

いて逆効果になってしまう。「勉強して疲れているんだね」など、上から目線ではなく、話をしていただけるとよいと思う。何もしないであげるのが一番いい場合もある。何か悩んでいそうだと思って声をかけてあげたことが逆にストレスになることも。

OB 父母 和佐田美代子さんのお話

東海に入るまでに何個か分岐点があったが、東海に入ってから昨春大学に入学するまでにもいくつか分岐点があった。分岐点から分岐点の間に、何をやったかで違ってくると思う。

【生物部との出会い】

入学した「異世界」で友だちを作るために部活に入るべきと思ったが、運動が100%ダメなので選択肢がなかった。



私は釣りが得意なので、もし何か獲物が必要なら捕まえてくるから(笑)と生物部を勧めた。最初生物部は気乗りしないようだったけれど、いざ金華山に採集に出かけると、先輩たちがすごく丁寧に教えてくれて自分で虫を採ってくることができた。

成績は、入学後最初の試験を終えて「93点だった」と言うので、「すごい、私の子にしてはありえない!」と思ったら、平均点が94点だった。東海生って本当にすごいので、中学の間の目標は「目指せ平均点!」。

【虫、生物、農学部】

次の分岐点は、高校での理系 or 文系の選択。タイプ的にはたぶん文系だと思っていたが、理系に行っておけば途中で文系にも行けるだろうから理系に進んだらどうですかとなって、理系に進んだ。

高1では70%くらい「虫」に取り憑かれて、平和公園に行って友だちと虫を採って遊んでいた。選択科目の生物では点が取れていたが数学が一番できなくて、本当にひどかったと思う。「生物が得意だから農学部に行きたい」と言う息子に「どんなことでも、やりたいことがやれるっていうのは幸せなことだから、それでいいんじゃない」という話をしていた。

【大学選択の移り変わり】

高2の終わりにA大学の農学部はどう?と聞いてきたため、「勉強する内容も面白そうだし、川もあるし虫もいて自然がいっぱいでいいんじゃない」と答えた。やがて、近くに山のあるB大学にしようかということになった。高3の夏には自宅から通えるC大学でも行けそうと言ったので目標を切り替えた。秋頃にはD大学も行けるかもとなった。でもそこは、1年生は総合教育部で学び、2年生で専門科目に分かれるので、希望する学科に行けないかもしれない。一方、E大学ならば、最初から専門に分かれているのが魅力だった。

E大学農学部の共通テストは、科目によって点数の圧縮割合が異なる。350点満点中、どの科目でどれくらい取るかをシミュレーションして対策を立てた。目標点数には少し足りなかったが、出願する運びに。二次試験の数学を補うため生物と英語をがんばり、英語は平易な英語を使ってミスしないようにと心がけた。二次試験で6割取れば大丈夫という見通し。合計点で見てもらえたので、なんとか補うことができた。

【プライドとの折り合い】

精神的な面に関して言えば、「プライドとの折り合い」が難しいと思う。「お母さんは僕がA大学の農学部でもいいの?僕は行きたいと思っているからいいんだけど、そういうのは何とも思わない?」と聞かれた。その時には何が言いたいのか全然わからなかった。受験が終わった後で、「もしA大学だったら、お母さんは恥ずかしくなかったか?」と聞かれた。本人がそんなことを考えていたなんて。でもこれは、東海に来たからこそ思ったことだと思う。友だち同士で付き合っているなかで、そういう会話があったのだろうと。そういうなかで手に入れたプライドってすごく大事だと思う。それを大事にしつつも、「自分のやりたいことが大事」という視点は、なくしてほしくないと思う。プライドは取り扱い注意です。

小山田雄貴さん(名古屋大学医学部1年)

高校2年生のときにあんまり芳しくない成績のまま3年生になってしまった。どうしてそうなったかも含め

て、中学生の頃から振り返ってお話させていたければ。

【部活に打ち込んだ中学時代】

中1から中3までは部活に打ち込んでいた。アーチェリー部に決めた理由は、先輩が新入生歓迎会で、「アーチェリーだったら競技人口がめちゃくちゃ少ないから君も全国大会行けるよ」って言われて、「ここしかない!」と思って決めた。

中学の間はそんなに勉強に力を入れることもなく、成績は真ん中ぐらい。高校生に上がったところで部活をやめて、そこから、カゾラカタの裏方として役者さんの後ろで光るライトを変える役割を担当したり、いろいろお手伝いさせていただいた。

【コロナ禍で成績下降】

高校1年から2年に上がるタイミングで勉強を始めた。クラスの周りの子の影響が大きく、2年生で理系A群に入ることができたが、この時期にちょうど新型コロナウイルスが流行を始めて休校になった。勉強習慣をつけられず、家でスマホをしたり、YouTubeを見たり…。いわゆる良くないルートに乗かってしまって、成績もかなり落ちた。結局、高2の最後のときには、だいたい200番前後で高3に向かって行った。いよいよ受験ということで本格的に勉強を始めたが、そのタイミングで理系B群に行くことになった。

【スマホとの付き合い方を変えた】

今から振り返って、これをしてよかったなと思ったのは、「春休みにスマートフォンとの付き合い方を変えたこと」。このままだとまずいなと思ったので、スクリーンタイムで制限をかけ、最初は6時間、次に4時間、2時間という感じで段々減らして行って、最終的に解約してもらった。スマホをやると時間もなくなるし、生活リズムも崩れて眠くなり、授業中寝てしまうサイクルが一番怖い。生活リズムを整えてしっかり授業を聞くことができたのはよかったと思う。

【学校の授業に集中】

もうひとつは学校の授業。「学校の授業をちゃんと



集中して聞く」。理解するための基礎知識がないと集中して聞いてもわからないと思ったので、授業をちゃんと理解できるよう、いったん高1や高2の授業をさかのぼって、まずそこを春休みに固めようと思った。あまり深入りせずに、しっかりと基礎を固め、目の前の授業を理解することを目標にした。学校の授業がわからないと、モチベーション的になかなか難しい。授業の後に、わからないことを先生に質問しに行くと、綺麗に解決して下さった。授業受けるときに、どこか一つは質問をしようと心掛けていて、自分の理解を疑いながら授業を受けるのは、自分には合っていた。学校の授業を軸にして対策を行ったのは、結果的にはすごくよかった。

【成績が伸びないとき】



対策していく中にも、うまくできないことはたくさんあった。ひとつ目は、「なかなか成績が伸びない」と思い悩んだと

ころ。特に数学は本当に伸びなくて…。2年のときは大体300番台ぐらいで、やっているつもりなのに伸びない…と思っていた。春休みに対策をしてからも、最初の模試で200番台。成績は上がらないけど、学力は伸びているはず。自分にそう言い聞かせて、その間をうまくだらけずに続けて、ようやく成績が上がるようになった。継続できるよう辛い時期には、大学に入ってからやりたいことを想像するとか、友だちと励まし合うとか、モチベーションが必要になってくるのかなど。自分の場合は、名大のパンフレットにある学生生活を想像して、もう少しがんばる!というふうにモチベーションを保っていた。

刺激になったのは、外部の模試を受けてみたこと。東海の校内模試は、みんなもすごいから、伸びないのは仕方ないかなって半ば諦めかけたときもあったが、外部の模試を受けてみると、自分の苦手な分野と得意の分野の差が表れて対策に繋がった。全国と比べてもできていない分野はまずいと思って「危機感」が出てきた。モチベーションを上手に対策に変換してあ

げるのが、危機感との一番よい付き合い方なのかなと思った。

春休みに始めて、高校3年生の1年間は、基本的には学校の授業を軸にした対策を行って、早めに志望校決めてという流れで対策したところ、最終的には何とか春休みに対策を始めたおかげで何とか成績の上昇が間に合った。ようやく直前期になるとなんとか成績が上がり始めて、これで名大を受けるという形になった。

【名大の魅力】

名大は医学のなかでも研究に力を入れている。研究施設も整っていて、1年生でも研究室に入れたり、いろんな研究室を回れるラボツアーがあったりして、すごいモチベーションが上がる。結構カリキュラムが緩くて、割と自由に1年の間は伸び伸びとできる。大学の特色をパンフレットとかで調べてみると、いいモチベーションになるのかなど。

編集後記

文化講座のよいところは、知る機会をもらい自宅に帰ってから学び続けることができる場所だと思います。世界にはたくさんの国があり、それぞれに文化、歴史があります。悲しい思いをする人が少しでも減るようにお互いを知ること忘れてはいけないと思わせてくれるウクライナ文化講座でした。

高2懇談会では、今年も貴重な実体験を聞かせてもらえました。なかなか理解ある親になるのは難しいですが、子どもたちに適度な距離で寄り添い、東海での残りの日々を大切に過ごせるようサポートしたいと思いました。

～今年度限定コーナー!「広報部長のつぶやき」

※T.F.Letter 本文内容とは関係ありません

今年度最後の発行となりました。つぶやきも最後。
一年間ありがとうございました。
来年度もどうぞご期待ください。